

# 非常時でも冷静心掛け

30年以内に70%程度の確率で発生が懸念される「南海トラフ地震」。兵庫県は大津波の発生に備え、津波防災インフラの整備や防災情報の発信など、ハード、ソフトの両面から防災・減災対策を進めている。11月5日の津波防災の日を前に、沿岸にある「福良津波防災ステーション」(南

あわじ市)「具尼崎港管理事務所」(尼ロック(尼崎開門))の各施設で津波に備える3人に仕事への思いを聞いた。(取材協力)兵庫県建設業育成魅力アップ協議会

福良津波防災ステーション(南あわじ市) 学習リーダー 波戸崎正明さん

県からの委託を受け、尼崎市臨海部にある日本最大規模の開門「尼ロック(尼崎開門)」で働く高橋知宏さん。船が往来するたびに扉の操作を24時間態勢で行っている。高度経済成長期、重工業の盛んな臨海部で多くの工場が地下水をくみ上げた結果、尼崎市域の3分の1が海面より低い「ゼロメートル地帯」と

なった。そのゼロメートル地帯を高潮被害から守るため沿岸部に整備されたのが防潮堤。臨海部にある工場地帯に船で行くには、防潮堤の一部としてつくられた尼ロックを通らないといけない構造になっている。尼ロックは24時間365日通航可能なため、高橋さんは開門を見ながら集中コントロールセンター

ターから常時監視。前と後ろの二つの扉を片方ずつ開け、船を安全に通している。「もし操作を間違えれば、海の水が一気に水位を下げるためには排水ポンプで運河の水を海側に吐き出す必要があるが、干潮になったわずかな時間だけは、扉を全開にして、運河の水を海に自然流下させている。高橋さんが懸念しているのは、近い将来発生すると言われている南海トラフ地震だ。地震発生から約2時間で津波が尼ロックに到達すると言われている。想定されている津波の水位は扉よりも低いので、扉を閉めておくべきだ。津波が来たら、規則に従って決められたことを決められた通りにするだけ。決してあわてないことを肝に銘じています」



尼ロック(尼崎開門)＝尼崎市 日本管財 高橋知宏さん



集中コントロールセンターで船を誘導する高橋さん＝尼崎市西海岸町

# 万全の対策で津波から守る



具尼崎港管理事務所＝尼崎市 港湾整備課主査 雨森尚子さん



防潮堤の補強工事について工事関係者と打ち合わせする雨森さん＝尼崎市東海岸町

# 防潮堤の重要さを伝える

大阪湾に面した尼崎、西宮、芦屋市の海岸を管轄する具尼崎港管理事務所。港湾整備課の雨森尚子主査は、沿岸部に整備された防潮堤に関する調査、設計、工事監督を担当している。現在の防潮堤は1950年のシエン台風を契機として整備された。しかし近年、老朽化が進んだことに加え、南海トラフ

大地震による津波にも耐えられる構造にする必要があることから、2023年度完了をめどに補強工事が行われている。「小学校の社会見学で高い防潮堤を見上げた記憶があります」と尼崎で生まれ育った雨森さん。2年前からその工事に携わることになり、既存の防潮堤の設計図面や現場を調べる中で、「先人の技

術の高さに驚いた」という。防潮堤が整備された昭和20、30年代は、重機や資材が今ほど十分でなかった時代だったが、松を基礎を補強して、大きな変形をしないようにしているのが雨森さんたちの仕事。防潮堤によりゼロメートル地帯にあるまちが常に高潮から守られているという。近い将来迫り来る津波のために防潮堤の補強工事を行っていることを、少しでも住民に説明する機会をつくり、防潮堤の存在や重要性を伝えていきたい。

事。「私たちが適切な工事を行うことで、過去から未来へきちんと橋渡しをしたい」

もう一つの思いは、防潮堤の意義について地域住民に伝えること。工場地帯にあるため、隣接する企業に工事説明をすることは多いが、住民への説明機会はほとんどない。そのため現場には、通行人に見てもらえるよう工事の内容を分かりやすく図解した看板を設置している。

## 津波防災インフラの整備や防災情報の発信…各施設担当者にインタビュー



福良津波防災ステーション(南あわじ市) 学習リーダー 波戸崎正明さん

鳴門海峡の渦潮クルーズ船が発着し、養殖いかだが並ぶなど、海と人のつながりを深く感じる南あわじ市の福良港は、南海トラフ地震で県内最大の8.1級の津波水位が想定されている。この港に臨んで立つのが津波に備える施設「福良津波防災ステーション」だ。水門、樋門、陸間を遠隔操作で開閉するシステムのほか、高台に避難する時間がない場合の緊急避難所にもなっている。

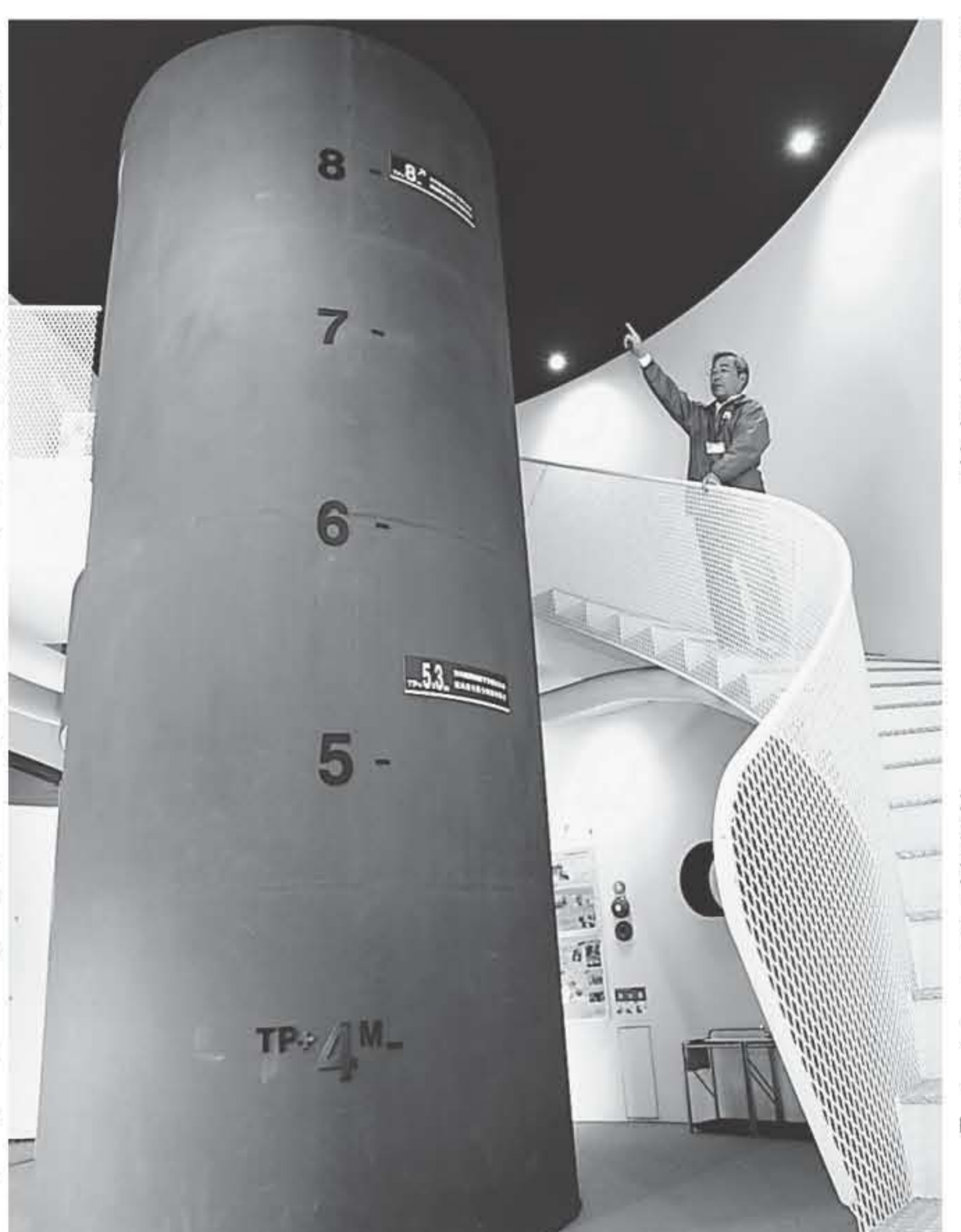
年間約1万8000人が訪れる回ステーションの防災学習室で、津波を「感じる」「知る」「逃げる」「備える」施設を活用して怖さや避難の重要性を伝えるのが学習リーダーの波戸崎正明さん。自治会長だったころに同ステーションができることを知り「まちづくりに活動に津波防災の要素も取り入れ、地域活性化と両立させよう」と志望した。

## 「自衛」の心構えが大切

2010年9月にオープンしたが、その半年後

に東日本大震災が発生。約1年後、宮城県南三陸町へ研修で出向いたときに「津波の恐ろしさを肌で感じた」と振り返る。1961年の第2室戸台風では、海に近い自宅の1階が高潮で浸水したが、津波が発生した46年の昭和南海地震の際はまだ生まれておらず、津波の経験がなかった波戸崎さん。被災地を目にした惨状、住民から聞いた話は、その後学習リーダーをする糧になった。「津波が日中襲ってくることは限らない」と高台に逃げる防災訓練を早期や夜間にも実施するようになった。

園児からシニア層まで全国から訪れる来館者に最も伝えたいのは「自分の身は自分で守る」という心構え。「地震発生から津波到達までの時間にやるべきことをやれば、多くの命が守れる。津波だけではなく、近年は風水害も多い。災害時に自分はどう行動するのかを考えることが、防災で一番大切なことです」



最大クラスの津波の水位8.1mを指さす波戸崎さん(南あわじ市福良甲、福良津波防災ステーション)